【特 集】前立腺癌の診断と治療—最近の注目事項を中心に—

5. 会員制クリニックにおける前立腺癌検診の実際

日本医科大学泌尿器科¹⁾, 東京医科大学泌尿器科²⁾, 水町クリニック³⁾, 西安交通大学泌尿器科⁴⁾

西 村 泰 司¹⁾ 本 多 了¹⁾ 橘 政 昭²⁾

滝 沢 佐奈江³⁾ 水 町 重 範³⁾ 陳 海 文⁴⁾

Examination for Prostate Cancer in Routine Annual Health Examination in a Membership Clinic

Taiji NISHIMURA¹⁾, Ryo HONDA¹⁾, Masaaki TACHIBANA²⁾,
Sanae TAKIZAWA³⁾, Shigenori MIZUMACHI³⁾ and Haiwen CHEN⁴⁾

¹⁾Department of Urology, Nippon Medical School

²⁾Department of Urology, Tokyo Medical School

³⁾Mizumachi Clinic

⁴⁾Department of Urology, Xi'an Jiaotong University

会員制クリニックの人間ドックで1993年から1998年の間に症状のない203名に前立腺癌検診を行い尿路感染症を伴ってはず血清PSA（前立腺特異抗原）値が高ったのは11名であった。そのうち患者の了承が得られて生検を行ったのは5名で、うち3名（1.48%）に前立腺癌を認め、前立腺全摘除術の適応と診断し同手術を施行した。

メンバー退会のため2名が消息不明だが、前立腺全摘除術を受けた3名は術後平均7年でPSA再発を含め再発を認めず、残りの6名ではその後の健診でも前立腺癌は発見されていない。会員性クリニックの役割はほとんどが予防医学にあると思われるが、今回の調査対象203名において前立腺癌に関しては、少なくとも現時点では当クリニックの役割を果たせたと考えた。

索引用語：前立腺癌（prostate cancer）、前立腺生検（biopsy of the prostate）、前立腺癌検診（screening for the prostate cancer）

緒 言

今回の特集は前立腺癌の診断、治療における最近の情報を中心に述べてもらった。では実際に診療の現場ではどうであるかを症例は203名と少なくまた古い調査結果ではあるが、血清PSA（前立腺特異抗原）による前立腺癌検診後もしくは前立腺癌手術後7年以上を経過したデータも含まれており、また論文未発表なので紹介することにした。

対象および方法

当時当クリニックの会員数は約500名であったが、女性会員もいて、また当時PSA測定はドックでもオプションで、1993年から1998の間に203名においてPSAが測定された。

PSAの測定法はこの調査期間の5年間に4回変わっているが、最終検査はTandem法で行われ、正常値は4.0ng/mlであった。

成 績

受診者の年齢分布は30歳代21人(10.3%), 40歳代48人(23.6%), 50歳代77人(37.9%), 60歳代47人(23.2%), 70歳代8人(3.9%), 80歳代2人(1.0%)であった。

PSA値が異常値を示したのは203人中12人で、その内尿路感染症のため一過性に異常値を示したと思われた1名を除くと11人(5.4%)で、年齢別では50歳代77人中4人(5.2%), 60歳代47人中5

Figure Age distribution and number of case with elevated PSA levels.

人(10.6%), 70歳代8人中1人(12.5%), 80歳代2人中1人(50.0%)であった(**Figure**)。

上記11名全例(**Table**)で直腸診で異常を認めなかったが、うち前立腺生検の了解が得られた5人で生検を行ないCase 7, 8, 10の3名で前立腺癌が発見され前立腺全摘除術の適応と診断し同手術を施行した。全摘組織における病理診断は1例がpT2a, 2例がpT2bで、その他の病理所見からも前立腺全摘除術の適応であったことが確認された。この3名は術後8, 7, 6年が経過したが再発は見られていない。前立腺生検を受け悪性所見が認められなかったCase 4, 9はPSA値2.0, 6.2ng/mlでPSA値は正常値に下降もしくはさらなる上昇は見られていない。

生検を受けなかった6名のその後の経過は下記の通りである。Case 11の86歳の患者は5年後に循環器疾患で死亡した。Case 1は引き続きPSA 12.5 ng/mlと高値であるが8年の経過を考えると、PSA値のさらなる上昇はなく前立腺が当時でも50gと大きかったのがPSA高値の原因と思われる。Case 5, 6はそれぞれPSA値3.2, 3.0ng/mlと正常値である。Case 2, 3は会員を退会され残念ながら連絡がとれない。

203名のうち、何年かにわたりドックを受けている間にPSA値が上昇したのはCase 4, 6の2例で初回は正常値であったが、それぞれ2, 4年の間に正常域を超えた。その他の症例は初回検査ですでに高値であった。

Table Characteristics of 11 patients with elevated PSA.

Case no.	Age (yrs)	PSA (ng/ml)	Result of Biopsy of	Treatment	Latest levels PSA (ng/ml)
1.	54	19.2	NP	None	12.6
2	55	4.6	NP	None	Lost for follow up
3	54	9.5	NP	None	Lost for follow up
4	56	8.7	Benign	None	2.0
5	62	4.4	NP	None	3.2
6	65	5.3	NP	None	3.0
7	60	6.8	Malignant	Prostatectomy	less than 0.2
8	69	9.2	Malignant	Prostatectomy	less than 0.2
9	60	10.2	Benign	None	6.2
10	71	8.4	Malignant	Prostatectomy	less than 0.2
11	86	14.6	NP	None	Died of other disease

NP: Not performed

考 察

今回報告した会員制クリニックのドックにおける前立腺癌検診のデータは、幸いその後約7年の経過も併せて報告できたのでその点古い調査結果の発表でも許されると思うが、本来なら20世紀の内に発表すべきものであった。その当時書き始めていた文頭は下記のようなものであった。

『水町クリニックは社会で知名度が高い、もしくは各界のトップの患者が多く、医療のブティックとしての機能およびサービスを要求される。つまりよい医療を待時間が最小限で受けられること、またかなりの重要事項として「痛くない診察」を目的として会員が来院する。例えば胃ファイバーも短時間で痛くなく正確な診断が行われている。従って、前立腺癌の精査も同様のことが要求される。しかし、胃ファイバーや大腸ファイバーと異なり経直腸の超音波6カ所生検は世間にあまり普及していないので、患者が「本当にそれを受けなくてはいけぬのか」と疑問に思うことが少なくない。その際は、医師が「本当にそれを受けなくてはいけぬ。」と自信をもって言うことが大切である。』と患者から前立腺生検の了解を得ることがやや困難な時代であったことがうかがえる。

ところが天皇陛下が前立腺癌の手術を受けられるとの発表が2002年年末になされ2003年は多くの人が前立腺癌検診に関心を持つようになり、泌尿器科医は先に述べた患者への説得もやや容易となるとともに、診断、治療に忙しい1年を過ごした。2004年は全国的にも前立腺癌を一斉に刈り取ったせいややや暇であったが、2005年1-2月は筆頭筆者の大学では開腹9例、腹腔鏡下7例、計16例の前立腺癌に対する全摘術が施行され、世間で言われている通り前立腺癌が増加の傾向にあることを示している。以上当クリニックの特徴、世の中の風潮とその変遷を紹介した。

さてドックの前立腺癌検診の結果についてであるが、前立腺癌発見率1.48%は母集団の性質や生検の適応がほぼ同様にもかかわらず、当時の他施設

のそれに比しやや高率である。倉敷市¹⁾、福岡県²⁾のドックでは前立腺癌発見率はそれぞれ0.91%、0.08%であった。筆者らのドックでより高率であったのは、本特集の診断の項で紹介した木村らの生検方法を用いたわけではないので、生検の技術が優れていたわけではない。推論に過ぎないが、一般に言われているように多忙な政財界の要人に前立腺癌が多いのかも知れない。

今回は一般に行われている自治体の前立腺癌検診と異なり、特殊な集団での調査結果であったが、ここでも検診が有用であった。欧米では前立腺癌が男性癌死亡者率の約20%を占めているが、わが国では、まだ3%強にしか過ぎないとのことで³⁾、今後さらなる前立腺癌の増加が予測されるが、どのような集団であろうとも前立腺癌検診はますます重要視されることになる。

おわりに

ある会員制クリニックにおける1993年から1998年にかけての前立腺癌検診を、社会の風潮の変遷も含め紹介した。今回対象となった203名における前立腺癌の発見率は高いものの予後はよく、PSAを用いた前立腺癌検診の有用性が再確認された。また会員制クリニックの役割はほとんどが予防医学にあると思われるが、少なくとも現時点では当クリニックの役割を果たせたと考えた。

今後さらなる前立腺癌の増加が予測されるが、検診対象がどのような集団であろうとも前立腺癌検診はますます重要となってくるであろう。

参考文献

- 1) 松田陽介, 寺田直樹, 前川信也他: 人間ドック PSA前立腺癌検診における成績. 腎泌尿防医誌 8: 30-32, 2000
- 2) 古賀寛史, 内藤誠二, 尾本徹男他: 福岡県におけるドック前立腺癌検診の現状—第2報—. 腎泌尿防医誌 8: 33-35, 2000
- 3) 川島英敏, 三原修一, 北川淳一他: PSAによる前立腺がん検診の評価. 腎泌尿防医誌 8: 36-38, 2000